

2022年1月20日

熱海市立図書館
館長 山田真士様

(仮)図書館基本方針実行プランへの提言

－図書館と学校との連携－

図書館協議会として令和3年度の会議を経て、図書館基本方針実行プランに関する意見をまとめました。

熱海市図書館協議会
石橋浩美
太田隆士(会長)
小澤共子
春日奈月
関口直子
山口正幸(副会長)

I. はじめに

(1) 「図書館協議会」について

全国の図書館協議会について調査・研究された論文によると、残念ながらその活動ははかばかしくない。「公立図書館の図書館協議会における諸問題—近年の図書館協議会調査を通して—」(山口洋著「紀要社会学・社会情報 第28号。2018年3月)という論文に、「近1年以内で「諮問なし」との図書館協議会も多くみられた。…年間開催数は、9回(町田市)から1回まであり、中には不定期の事例もある…ある程度の回数確保は不可欠で、定例会以外の活動を含めても年2回や3回では全く足りないといえる…」という指摘がある。これは熱意の足りない例への言及である。他方熱意に溢れた協議会にも問題があるようで、議論が当該自治体から県、国の図書館へと拡大し、理想的な図書館像が追求される傾向が見受けられ、「図書館協議会は会議のなかにある」と揶揄されている。つまり議論を重ね、理想を追い求めてはいるが、現実を動かす方向には機能していないという指摘である。

平成28(2016)年度文部科学省委託調査「学びを通じた地域づくりの推進に関する調査」のなかで、図書館協議会の課題、改善点への質問があり、それに対する図書館側からの回答として「図書館協議会は…会議が形骸化することのないよう…実効性のある協議内容とすることが必要である」とあり、「本調査における最も注目すべき点は、この最後の質問ではないだろうか」とさえ指摘されているのがじつは現状と言わざるを得ない。

熱海市の図書館協議会の回数も決して多くはなく、「形骸化することのないよう…実効性のある協議内容とする」ためにはどうすべきであろうか。美しい理念も泥臭い具体策に支えられない限り、現実を改善させる力を持ちえない。実効性を持たせるためには、可能な限り論点を絞り、できるだけ具体的な方策を答申・提言することが必要であると考えられる。

(2) 熱海市の図書館協議会について

第一期協議会で協議会の在り方が検討され、第二期協議会で網羅的な答申が作成されたことをふまえ、第三期にあたる現協議会としては上で述べたことから、各論に議論の比重を移していくことが相応しいと考えられる。

何が現在の熱海市立図書館に求められているのか二つの資料により調査してみた。『図書館年報 令和2,3年度(2020,2021)』21頁の年代別利用者数に見られるように、13~15才、16~18才、19~22才の利用者数が低いことが顕著であることがわかる。

次に図書館ホームページで公開されている過去の協議会の議事録にも目を通し調査した。実質的には初回となる2017年8月の第2回協議会で、「学校図書館との連携」がすでに議題となっている。しかし意見が拡散してしまい、消滅してしまっている。

この議題は浮上しては立ち消えになっている。このような経緯をふまえると、論点を『図書館年報』で目標として設定されている「学校図書館との連携」(11 頁)、あるいは前回答申の 13 頁でも言及されている「学校との連携」に提言の内容を絞るのが適当ではないかと考えられる。

そこで今回は、これまで図書館として対応が充分ではなかったと思われる小学校高学年と中学生に向けての対策に内容を絞り、具体的で実効性のある提言をしたい。

II. 提案の考え方ー図書館と学校との連携強化は市の活性化に結びつくー

先に紹介した平成 28 (2016)年度文部科学省委託調査「学びを通じた地域づくりの推進に関する調査」というタイトルにもあるように、学校と図書館との連携を強化することは地域づくりの推進にも寄与するものでもある。

10 年後の熱海市の人口、税収、図書館予算を鑑み、現有資産を活用すること、図書館を文化的な活動・交流の拠点(HUB)として機能させるために、さまざまなネットワークを構築することを目指し、図書館と学校との連携強化の具体策を提言したい。

都市論において「街を活性化させるには若者を回遊させることを目指せ」と真っ先に言われるが、まず市立の小中学生が市内を回遊する機会や催しとして図書館がどのようなものを提供できるのか考えてみたい。“回遊する”といっても、それは現実空間とともにネット空間においても展開されることも含む。図書館のホームページに小中学生がアクセスし本を借りたり、電子図書館にある郷土資料を利用することも“回遊する”ことに含まれる。

小中学生が現実的には図書館に足を運べない状況下では、発想を変え、図書館員が学校に本や資料を届けたり、図書館が企画する小中学生むけの講演会等を小中学校に出掛けて実施することも含む。

熱海市は国指定の重要文化財あるいはそれに匹敵する文化財を所有している数少ない地方自治体であるが、その誇るべき文化遺産の活用は現在必ずしも充分ではない。図書館が拠点となり、こうした文化施設の歴史的資料や参考図書をいっそう充実させ、小中学校の教育に活用して戴き、小中学生がふるさとに誇りを持てるようになるプランを考えたい。

熱海の小中学生に知ってほしい文化財の選定には『市制施行八十周年記念 熱海温泉史』(以下『熱海』と略記する)も活用する。

この提言において対象としているのは主として小学校高学年(4~6 年生)と中学生とであるが、これを実効性あるものとするためには、実際に教育・指導に携わる小中学校の教員、学校司書および図書館員の理解と協力とが不可欠である。

なお小学生低学年にはセカンドブック等で対応策を講じており、県立高校には対応が市として少々事情が異なるので、市として対応策がとりやすく、かつ図書館利用率の

低い小学校高学年(4~6年生)と中学生とに焦点を合わせているが、もちろんその範囲に拘泥するものではない。

III. 具体的な提案

図書館と学校との連携を促進するため、つまり小中学生が図書館を利用しやすくするために着手してほしいことを図書館の三大方針に沿って、提示したい。

(1) 「熱海の歩みを学べる図書館」

ー図書館と市内の文化施設見学との連携ー

熱海の歩みは、歴史的資料や図書で学ぶと同時に、現に熱海市内に存在する文化施設の見学とを組み合わせれば、いっそうわかりやすく魅了に富むものになる。

まずは、学校で企画される社会科見学あるいはフィールドワークの枠に、市内にある文化施設や歴史的施設見学を入れ、より充実した実施とするために、図書館と学校との連携を促進したい。詳細は今後検討することになるが、例えば図書館ホームページに「熱海を知る!」というフォルダーを作り、その中に社会科見学で教員や生徒が必要とするであろう資料をまとめたフォルダーを作る。例えば、「丹那トンネル」というフォルダーに、図書館が保有する郷土資料や丹那トンネルを扱った小説『闇を裂く道』(吉村昭著)等をまとめ、生徒が調べたり、教員が指導する際の便宜を図る。また「旧日向家熱海別邸」というフォルダーには熱海市が所有している別邸の写真や、日向邸を詳しく説明している『自然な建築』(岩波新書、隈研吾著。特に第1章)等をまとめる。

今年度の秋に、ある市内小学校が社会科見学で、ごみ焼却場・丹那トンネル(慰霊碑)・澤田政廣記念美術館・中山晋平記念館を訪ねたそうであるが、澤田美術館には短時間しか滞在できなかったということを目にした。一方東京国立博物館では埼玉県川口市の中学生が社会科見学で訪れていたが、館内に数時間滞在し、課題となっているレポート作成のために鑑賞し、メモを取っている光景に出会った。澤田美術館には申請すれば重要文化財に認定されると思われる作品が相当数ある。フォルダー内に用意された資料で事前学習し、澤田美術館に数時間は滞在し、訪問後にレポートや感想文を作成することは、昭和の美術のみならず、時代を学習することにもなる。他の施設についても同じことが言える。重点的な見学で深く学んでほしい。

『熱海』の小中学生用の冊子の作成が望まれるが、すぐに実行できることとして、学校で生徒が調べたもので、優秀なものを集めて、各フォルダーに入れておくようにし、蓄積していくのも有益な方法であろう。この際にも教員や学校司書の理解・協力が不可欠である。

フォルダーとして設定したい施設として以下のものが考えられる。

- ① 澤田政廣記念美術館(『熱海』 332-333, 228 頁)、中山晋平記念館(『熱海』335 頁)、熱海梅園。この三つの施設を一日がかりで訪問し、学んでもらう。
- ② 池田満寿夫・創作の家および記念館(『熱海』? 頁) 同上。
- ③ 凌寒荘および杉本苑子文学館(『熱海』335 頁) 同上。
- ④ 伊豆山神社および資料館(『熱海』 72-73 頁) 同上。
- ⑤ 起雲閣(『熱海』 184-186, 203, 338 頁) 同上。
- ⑥ 旧日向家熱海別邸(『熱海』188-190, 338 頁) 同上。
- ⑦ 丹那トンネルおよび慰霊碑

繰り返しになるが、小学校。3・4 年生で行われる地域学習に際して、図書館が所蔵する資料の使い方を教え、貸し出して、学習の補助をする。生徒が図書館に来館するのが難しい場合には、館員あるいはボランティアが出張することが望ましい。

以上は誇るべき文化施設でありながら、まだまだ活用する余地はあり、小中学生が熱海で学んでいることを誇りに思える文化施設でありながら残念ながら知られていない。多くの市民にとってもそうかもしれない。また多忙な館員や教員や学校司書の補助となるために、外部組織(美術館の館員、まち歩きガイド)とのコラボも有効であろう。

当該施設のガイドの手配、あるいは市内ボランティアガイドの会への依頼等を関連部署と密接な連携を保ちつつ、実り豊かな社会科見学の実施となるよう図書館が拠点(HUB)としての役割をはたす。

事前学習のための図書を図書館で揃え、各学校に貸し出すためにも、社会科見学の見学対象を上のように絞り込むことが望まれる。市内の文化施設・歴史的施設を「重点的に社会科見学の対象とするよう図書館から教育委員会にも働きかけて戴きたい。

事前学習をし、見学後にはレポートや感想文を児童・生徒に書くことを指導する。優秀な感想文には学校と図書館とが協力し、「社会科見学コンクール」を実施し、賞を与えることもよいだろう。

なお、調べ学習の範囲が中学校区あたりまでに限定されているようであるが、市内の優れた文化財の対象から除外してしまうのは、あまりにも惜しいことではなかろうか。

また、各施設を見学した後は図書館に寄り、関連図書を借り出す機会を与える。あるいは、会議室で教員あるいは図書館員あるいはボランティアがミニ講演をするのも良い。

規模の小さい学校は、小学校高学年(4~6年生)合同あるいは中学校(1~3年生)合同で見学することとし、規模の大きい学校は各学年別に年度ごとに施設を見学する。

それぞれの施設につき、年齢に応じた選定をし、十冊程度の参考書をそろえる。例えば岩波ジュニア新書などは、専門の研究者の要望に応える内容が、平易に説明さ

れており、是非小中学生の読書に薦めたい。

また小中学校の「行事予定」、「教育計画」を把握しておく必要もある。

以上について、まず図書館員のなかでワーキンググループを立ち上げ、提示案の実現に向けた対応策作成に着手して戴くことを望む。

(2) 「市民が集える図書館」

① 小中学校の図書室が市立図書館の窓口となるタブレットの活用一

小学生には移動の制限があり、中学生になると忙しくて図書館にまで出向く時間がないというのが利用者数の少ない原因であろう。しかし現在は、学校には図書室があり、生徒はタブレットを持っている。この利点を活かし、各小中学校に“仮想の市立図書館窓口”があるようにし、貸出・返却を可能にすることは難しくはないはずである。

生徒さらには教員もタブレットで予約し、図書館は従来の発想を変え、図書館が本を届けることをぜひ推進して戴きたい。館員あるいはボランティアが学校に図書を例えば週に1回届けたらどうか。

また購入希望の書籍を各学校の図書館でも行えるようにして戴きたい。

学校に貸し出す場合には、貸出冊数を弾力的に運用する仕組みも作る。

留意すべきこととして、教員の理解・協力が肝要なことであり、教員自身も利用しやすくすべきである。

小中学生のパスワードの管理は、個人情報とはいえ、まだまだ管理しづらい年代でもあり、弾力的な運用をお願いしたい。

読書週間等のイベントごとに学校図書館に市立図書館が企画するポスターを貼るなどして、利用を呼び掛ける。

② 小中学生および小中学校教員にむけたホームページへの改良

小中学生および小中学校教員や学校司書からの意見も聞いて、魅力的で使いやすいホームページに改良していく。教員からの理解と協力が不可欠であるが、個人的な連携ではなく組織的な連携となるように校長の理解と協力も不可欠である。

③ 教科内容、行事日程との連携

小中学生にも魅力的な市立図書館にするためには、図書館員が学校の教科書の内容を知り、各学校の行事予定表を把握しておくことが望ましい。さらに教科書に掲載され、紹介されている図書の購入も検討して良いと思われる。

また小中学校の“教科書”を調査・研究し、その内容を把握しておく必要もある。

④ 調べ学習・社会科見学との連携

本のセット貸出はすでに実行されているが、さらに発展させ、調べ学習にも拡大し、希望する学校に回覧することも可能にする。調べ学習のテーマとしては、福祉関係(ユニバーサルデザインや点字、手話など)、職業調べ、学校独自のミカン学習、大根学習、国語の教科書に載っている図書、工作関係、国際関係などが考えられる。

調べ学習にも図書館は小学校教員に積極的に働きかけ、図書館を利用した調べ学習のための「手引き」を作成し、「調べ学習コンクール」を実施することが望まれる。浜松市などの例が参考になろう。

以上の提案にも、ワーキンググループを立ち上げ、提示案の実現に向けた対応策作成に着手して戴くことを望む。

⑤ 小中学生向けの講演会

図書館主催の講演会は成人対象だけであるが、小学校高学年(4～6年生)と中学生とを対象とした講演会を年1回でも実施してほしいものである。できるだけ上記の施設に関連した講演内容とし、小中学校と協議し、小中学校に出張して出前講演をする。その際に、先述したフォルダー内の関連図書を紹介し、小中学生が貸し出しをするように働きかける。

学校出前講座は授業時数が減ると懸念されているが、家庭教育学級や春・夏・冬休みに学校開放するなどの利用も考慮されていいのではないか。内容は社会科見学の対象となる施設が望ましい。

⑥ 各種コンクールの実施

「社会科見学コンクール」、「調べ学習コンクール」等。

⑦ 各種講座の開催

例えば、夏休みに「読書感想文書き方講座」があると、子どもたちは「読書感想文の書き方」等の書籍だけを読むよりも図書館を頼りにして来館するのではないか。すでに「読書感想画講座」はあるので、感想文講座もあるとよいと思う。

⑧ 学習参考書の整備

小学校高学年(4～6年生)と中学生が使える学習参考書を何セットか配架、貸出する。選定は教員の協力をあおぐ。

⑨ 災害時の図書館機能

本年 7 月に伊豆山で発生した土石流災害の記憶にもまだ新しいことであるが、災害の際に不安定になる子供や大人のために、図書館から被災地に本を特別貸し出しすることも、図書館の機能として検討して戴きたい。

(3) 「市民と共に創っていく図書館」

① ボランティア活動の受け入れ

カウンター業務、図書整理の補助さらにデジタル化の補助をする機会を積極的に提供し、小中学校に働きかけ、受け入れる。これには募集を広げ、高校生の参加も呼び掛ける。

社会福祉協議会が毎年夏休みに行っている中学 1・2 年生対象のボランティア体験に、図書館もぜひ積極的にできるだけ多くの生徒を受け入れる体制を整えて戴きたい。

枠を広げることになるが、地元熱海高校生福祉課ボランティア部の活動受け入れの場としても、積極的に受け入れる。高校生は PC 操作も得意であろうし、図書整理や受付業務なども手伝ってもらおう。

② 公民館寺子屋：夏休み&冬休みの宿題学習との連携

教育委員会生涯学習課主催の、小学 2 年生～6 年生を対象として夏休み 7 日間・冬休み 3 日間で実施される夏休み&冬休みの宿題学習と各講座との連携をはかる(場所は、中央・多賀・網代・伊豆山・西部コミュニティー・泉 6 か所で行われている)。

10 日間の学習の中に「図書館へ行こう!」講座を設け、班ごとに調べ学習をする。図書館へ直接行くことが参加可能の公民館は、中央と西部コミュニティー、バスで調理実習にも来る伊豆山公民館 3 か所である。

他の場所では、「図書館を使おう!」とし、早い時期にあらかじめ小学生あるいは指導員が図書館ホームページで探し、予約しておいた本を活用しやすい環境を整える。あるいは館員が選定しておいた図書のセットを届ける。

調べるテーマは子どもが自由に決める。あるいはテーマは図書館から資料を提供してもらおう。

③ 小中学生がとともに文献を蓄積していく

文化財に関する小中学生向けの文献はそれほど多いわけではない。先述したが、各施設を見学した後に、生徒に感想文を書いてもらい、その中で優れたものはアーカイブし、活字化し、ホームページの当該フォルダー

に保存していく。あるいは冊子としてまとめていく。この冊子は次年度以降の参考資料として、生徒が施設について学習する際に配布する。

④ タブレットやスマートフォンの利用

ブックバスの耐用年数も鑑み、積極的にタブレットを活用する方向を並行して進めていく。その方法を小中学校から市民全体へ拡大するのも一つの方法であろう。

以上の提案にも、ワーキンググループを立ち上げ、提示案の実現に向けた対応策作成に着手して戴くことを望む

IV. まとめ

図書館は子供たちが自分の将来像を描くに際して頼りがいのある拠点である。

今回の提言では、小学生高学年および中学生を中心の図書館活用という観点から、できるだけ具体的な提案をとりまとめた。

熱海は優れた文化財をじつは数多く所有する街である。例えば旧日向家熱海別邸には東京のみならず関西の建築学科の学生や建築家が、さらにはドイツ・ベルリンの建築家までもが訪れている。せっかく熱海の小中学校に学びながら、日向邸や建築家ブルーノ・タウトを知ることなく卒業していくのはまことに惜しいことである。澤田政廣の彫刻作品についても杉本苑子の文学作品についても同じことが言える。

図書館が拠点(HUB)となり、あるいは資料・図書を保有する図書館が教育委員会に働きかけ、小中学校、関連部署との連携を高め、図書による学習と施設の訪問を組み合わせた教育にいつそうの注力を望みたい。

関連する図書の整備・充実は各学校では無理であろうが、拠点(HUB)である図書館が機能すれば、つまり充実した図書を各学校に貸し出すという方策をとれば難しいことではない。さいわい小中学生がタブレットを利用できる恵まれた環境にあり、その利点をさらに活用し、小中学校にいながら図書館に出向かなくても、タブレットを使うことで図書館での貸出・返却を気軽にできるのである。

こうしたネットワークを充実化させるためには図書館員の活動と小中学校教員および学校司書の理解・協力が欠かせない。館員数の不足、教員の多忙な業務という現状もあろうが、図書館機能を活性化させるために、将来を担う小中学生に注力した提言を取りまとめた所以である。まず図書館員のなかで各問題を検討するワーキンググループを立ち上げ、提示案の実現に向けた対応策作成に着手して戴くことを望む。

冒頭でも記したように、図書館と学校との連携強化は市の活性化に結びつくものであり、学びを通じた地域づくりの推進にも寄与するものである。

以上、ご理解と、「提言」実現に向けた図書館活動を望みたい。